様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３８８

研究課題名（和文）「近代」の反復と多様性――「東と西」の知の考古学的解体に関する研究

研究課題名（英文）Repetition and Diversity of "Modernization": Analysis of Discursive Deconstruction of "the East and the West" by Using Foucault's "Archaeology"

研究代表者
伊勢　芳夫（Ise, Yoshio）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・名誉教授

研究者番号：８０２２３０４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究はミシェル・フーコーの「知の考古学」の研究を援用しながら「言説形成＝編成」概念を再定義化することにより独自の「知の考古学」的方法論を確立し、その方法を歴史資料の分析に活用し、英領インドにおけるインド表象の構築、白人優位の世界システムへの植民地域の取込みと土着性の変容、一方、そのようなアジアの植民地化に直面した日本の近代化の促進と西欧列強への対抗言説の創出、そして太平洋戦争の敗戦を機にGHQの占領政策によってアメリカの言説編成に日本がいかに取り込まれていったかについて、英・米・印・日の視点から共時的・通時的な比較研究を実施し、その研究成果を論文、著書、及び学会発表により公表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、旧植民地地域の言説（表象）研究では、その研究対象として日本が除外される傾向がある。しかしながら本研究では、欧米優位の文化ヘゲモニーに組み込まれたアジア諸国と同様、一方的に欧米の言説の中で表象された日本の近代化と土着の変容の歴史と、そしてその過程で西欧帝国主義の対抗言説として創出された日本帝国主義を、「知の考古学」的方法論でもって検証した。その様な複合的な研究を行うことによって、より普遍的なレベルでの帝国主義の文化支配や近代化の実体が明確になり、したがって、単にポストコロニアル研究を補完するだけではなく、いかなる優位者による異文化表象や言説形成を研究するための方法論を構築できたと考える。

研究成果の概要（英文）：　For this research, I had developed a revised “Archaeology of Knowledge” methodology by redefining the concept of “Discursive Formations”, drawing on Michel Foucault's research. Using this approach for various historical materials, I have explored the construction of “representations of India” in British India, the incorporation of colonized areas into the world system of White supremacy and the transformation of indigeneity, while I have observed how the modern Japan in the face of colonization by the West had promoted its modernization and created a counter-discourse against the West during the process. The research also focused on how Japan was incorporated into the American discourse through GHQ's occupation policy in the wake of its defeat in the Pacific War. I have conducted these researches by using synchronic and diachronic comparative approaches from plural perspectives, and published the research results in papers, a book, and a presentation at an academic conference.

研究分野：英国植民地文学、日英文化比較

キーワード：知の考古学　英国植民地文学　日本植民地文学　近代化言説　GHQ日本占領政策

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ミシェル・フーコー(Michel Foucault)は、『知の考古学』と『言葉と物』においてフランスを中心とした西欧の「知層」を「知の考古学」的方法で分析し、『狂気の歴史』等の著作で、文化的言説の変遷の観点から歴史の新たな構築方法を提示した。また、エドワード・W・サイード(Edward W. Said)は、『オリエンタリズム』において、フーコーの文化的言説分析の方法論を用い、西欧における東洋研究の言説的位置づけを行った。研究代表者は、平成 19 年度以降、フーコーの「知の考古学的」方法論を援用し、また西欧の言説に取り込まれた「東洋」というサイードの枠組みを参考にしながら、共時的・通時的にイギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成の比較研究を行ってきた。そして、イギリス・英領インドと日本・日本植民地を 2 つのパラレルな関係として位置づけ、それら 2 つの地域群の文化的言説編成の変容と「知層」の共通点と相違点とを見つけ出した。その研究成果を、著書『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』（575 頁：日本語）として纏め、平成 25 年 3 月 1 日に溪水社から出版した。その出版以降の研究において、非西欧圏で唯一自発的な近代化に成功し「新帝国主義」の政策を遂行した日本社会の「知層」についての知の考古学的分析、及び、日本の占領下にあった台湾、朝鮮半島、そして旧満州地域において、日本の植民地政策や近代化言説の伝播によっていかに近代化が促進されたのか、一方、それらの地域の占領期を通しての土着文化への影響、そしてその結果とていかに土着文化が変容していったかについての調査研究行ってきた。

本研究課題を構想するにあたって、上記の研究から、19 世紀から 20 世紀にかけての帝国主義の時期に、イギリスによる世界システムの構築と、その亜流というべき日本の「世界新秩序」の建設／挫折についての比較研究をさらに深化・拡大させ、世界システム構築の中心的国家であったイギリスがインド以東の植民地に対して植民地政策を実施し、その地域や住民がそれにより変容していった過程と、日本の近代化、及び、日本の植民地下にあった地域の変容過程を「言説形成＝編成」概念を再定義化することにより独自の「知の考古学」的方法論を確立し、その方法を歴史資料の分析に活用し、イギリスの近代化モデルと日本の近代化モデルの相違点、及び脱植民地状況を明らかし、従来、近代化＝西洋化と考えられがちであった「近代化」概念を修正し、新たな「近代化」概念を構築することの必要性を認識した。なぜなら、第 2 次世界大戦後に次々と旧植民地地域が独立を果たし、ポストコロニアル期において近代化の促進とナショナル・アイデンティティの追求がなされてきたが、それらは必ずしも西欧近代を踏襲したものではない。いやむしろ、21 世紀初頭の中国の躍進や IT の発展した世界は、従来の西欧型国家モデルを基にした近代化とはかなり異なった様相を見せている。したがって、「西洋」という特定の地域性や時代性を捨象した「近代化」というものを抽出する必要があると考えたのである。

２．研究の目的

本研究課題の目的は、19 世紀以降イギリス、そしてアメリカを中心とする西欧によって築かれてきた世界システムが、中国やインドの台頭によって新たな展開を見せている世界情勢において、「近代化」の本質と「土着性」の変容を文学・文化論の視点から問い直すことである。そのため、世界システム構築の中心的国家であったイギリスがインドに対して植民地政策を実施し、インド・インド人がそれにより変容していった過程と、日本の近代化、及び、日本の植民地下にあった地域の変容過程とを「知の考古学」的方法論を歴史資料の分析に活用し、イギリスの近代化モデルと日本の近代化モデルの相違点、及び脱植民地状況を明らかにすることで、従来、近代化＝西洋化と考えられがちであった「近代化」概念を修正し、21 世紀に適用できる「近代化」概念を構築することである。

それと同時に、逸早く近代化を成し遂げるとともに、欧米列強に伍する帝国主義国家に躍進し独自の言説形成を開始するに至った日本が、太平洋戦争の敗戦を機に GHQ の占領政策によってアメリカの言説編成に取り込まれていくことで、それまでの日本の近代化の方向性がどのように変化したのか、また、日本の土着性がアメリカの言説編成の中でどのように変容していったのかについて、「知の考古学」的方法論を用いて解明することである。その分析により期待される発見は、イギリスの近代化モデルとも、英領インドにおけるインドの近代化とも、また、明治以降の日本の近代化モデルとも異なった別種の「近代化」タイプであることが予想される。

そして、上記の研究課題に関して、研究代表者、及び、研究協力者によって得られた知見を、論文、著書、及び学会発表により公表することを目的とした。

３．研究の方法

（１）研究の方法論の概略：一般に文化・歴史研究では、研究者の所属する「共同体」を起点として過去や異文化が分析・解釈され、その上で再構築される。しかしながら、その過程で研究者自身の眼差しや価値観のフィルターを通過することにより「他者化」――いわば剥製化――されるため、再現前化された「過去」や「異文化」は主体的で「生きた」歴史・文化とはいえない。本研究課題においては、「生きた」歴史・文化を表象＝再現前化するために、ミシェル・フーコーの提唱した「知の考古学」理論を基に、記号論やポストコロニアル研究等の知見を加味するこ

とによって、歴史・文化研究のためにカスタマイズされた独自の「知の考古学」的方法を使用する。その方法により、言説形成＝編成を生み出すコード体系――研究する時代、場所においてドミナントに流通する／していたコード体系――を発掘し、その時代・その社会の人間がいかに考え、その考えを基にどのように発話し、行動したかを可視化する。それが、本研究の「知の考古学」の方法論であり、その方法を歴史資料やフィールドワークによって収集したデータの分析に活用し、考古学者が地層から過去の遺物を発掘してその時代の生活様式を復元するように、過去のある社会における価値観や思考傾向を復元する。

以下に、本研究の「知の考古学」の方法論の主要な基本概念を詳述する。

（2）「知の考古学」と文化コード：フーコーの知の考古学の方法論において、たとえば『狂気の歴史』では、「狂気」に関わる様々な記録を数多く収集し、通時的、及び共時的な影響関係を調査し、「狂気」に関する言説形成＝編成を、過去の言説の継続、衰微、不連続、または復活の過程と、同時代の幾つかの領域の言説の影響、対立、もしくは併存関係により、大きな「狂気」言説の形成＝編成が推移し、個々の現われ（言表）を生み出していく様態が明らかにされた。その現れ（言表）とは、文字として著作や書簡等として現れる場合もあるし、絵画や、「狂気」の認定方法、「狂人」に対する処置の在り方、臨床医の治療方法、学問的研究領域としても現れる。

ただ、フーコーの『知の考古学』では言説の基本単位を「言表」とするのだが、しかし言説を反復、拡散、編成するファクターが具体的に説明されていない。フーコーの試みは言説形成＝編成の変容のメカニズムの解明ではなく、「言表」群を分析することにより言説形成＝編成を再現前化させることにあったと思われる。一方、本研究課題では、フーコーの知の考古学の方法論に構造主義的な文化記号論を組み合わせることによって、言説形成＝編成を可視化し、文化変容を惹起するメカニズムを記号論的に解明しようとする試みである。つまり、「コード」を言説の基本単位、あるいは言説形成の動因とし、社会への新たなコードの導入が、新たな言説の反復・拡散、そして体系的な編成をもたらすと措定するのである。

社会というものがベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)のいう意味での「想像の共同体」であり、ある地理的な空間に生物学的に誕生したヒトの群れが集団として団結するほどの同質のアイデンティティや世界認識を共有するためには、共同空間に流通可能な「単位」の存在が不可欠になる。上記で述べたように、その基本単位を「コード」であると措定する。そもそも、人間が認識し、表象し、伝達できるためにはコード化が必要となる。紫外線や放射線のことを考えてみればそのことは明白であろう。それらは宇宙の誕生以来「常に」存在しているのであるが、ヒトにとっては、それらがコード化されるようになって初めて「存在」することになる。

本研究課題で注目するのは、「コード」とともにその歴史的変遷である。送り手が伝えたい内容をある言語で記号化（encode）する場合、記憶されている語彙データから内容に合致する語彙を抽出するとともに、受け手が意味内容を解読（decode）できるようにその言語の文法規則によって配列することによって意味の伝達が行われる。しかしながら、その「意味」は常に不変というわけではなく、時代・地域によって変化する特性がある。たとえば、「天皇は、日本人の１人に過ぎない。」というとき、1930 年代にこのことを発話するのと 2020 年代に発話するのとでは全く違った「意味」が生じる。これはこの間に日本語自体が変質したというよりは、その違いはそれぞれの時代の天皇観に根差したものであり、その意味で、言語（記号）が構成するメッセージが通過するコンテクストが言語に付加する「コード」が時代の経過とともに変化した結果であると考えられる。この場合の「コード」とは、語と語をつなぎ合わせて意味をつくりだすための「コード＝文法」、つまり言語コードではなく、社会というコンテクスト内でメッセージにその時代／地域に特有の含意を付加する「コード」、すなわち文化コードのことである。

（3）文化の拘束力と価値の源泉：人間の社会は、時代とともに生成し、変化し、細分化してきた独自の文化のコード体系を持っている。そしてわれわれは、幼少期から、家庭、学校、生活・政治共同体、宗教施設を通して、コード化された記号を媒体としてその社会が承認した思考様式や行動様式を刷り込まれていく。その結果、社会を構成する成員の一人一人はその文化コード体系の複雑な網目にがんじがらめに縛られ、コードの生み出す「言表」に対して疑義を感じる余地が極めて小さいのである。あたかも、それらは自明、真実のものであり、それを疑うことが許しがたい誤り・冒涜のように感じる精神構造が作り出されていく。たとえば、キリスト教の教義にどっぷり浸かった 16 世紀までのイタリアにおいては、天が地の周りを回るのではなく、地が天の周りを回ると主張する人間に対しては迫害してもいいという感情を生じせしめたのであった。

このように、いかなる社会においてもその構成員がその社会で使用される言語の語彙と文法を駆使して自分の考えを「自由に」発話することを規制するのは、警察や軍隊というような暴力装置だけではなく、「言わされる」、「言えない」、あるいは「言いたくなる」というような状態に常に置く「言説」機能を可能にするメカニズムが存在するからだと考える。このような拘束装置は、家庭や学校やマスコミといった社会制度によって個人をコントロールする、いわばアントニオ・グラムシ(Antonio Gramsci)のいう「文化的ヘゲモニー」 による支配を可能なものにする社会装置といえるだろう。それでは、なぜ「言わされる」、「言えない」、あるいは「言いたくなる」というような状態に人は置かれるのであろうか。本研究課題においては、「言説」機能は、その社会のドミナントな「価値観」と紐づけされていると考える。その「価値観」が社会の構成員によって共有されることで、個々の構成員の言動が拘束／誘導されるのである。それでは、その「価

値観」はどのように生まれてくるのだろうか。この点について、本研究では先験的・超越論的普遍主義の立場からではなく、「複数の文化」観、つまり、それぞれの文化の中核にあると思われる「価値の源泉」というメカニズムを想定する。

文化の中核に「価値の源泉」があるというのは、もとより仮説である。しかしながら「神」の実在を信じているのならともかく、「善／悪」・「是／非」の基準をわれわれの「心」もしくは「頭」にささやくものが一体何なのか、そのメカニズムとは何なのか、そのことが疑問になるだろう。

物質界においてある磁場のもとに物質をおけばその物質が正、もしくは負の電荷を帯びるように、文化事象は、その文化の「価値の源泉」が支配する言説編成の中で「善」の価値を帯びたり、「悪」の価値を帯びたりすると考えられないだろうか。そして、それがいずれの価値を帯びるか、そしてどの程度の強さで価値づけされるかは時代や社会のドミナントな「価値の源泉」によって規定される。たとえば、近代日本において「愛国心」の辿った歴史には非常に興味深いものがある。明治時代、政府や知識人は「愛国心」を国民に植え付けるため、それを称賛した。そして、戦前・戦中においては、「愛国心」があらゆる一切のものに優先される最高の美徳のように扱われたのであった。しかしながら、太平洋戦争の敗戦とともに、一転して「愛国心」は「悪徳の権化」のようにみなされるようになった。

このように「価値の源泉」というような「善／悪」・「是／非」の判断をコントロールする源を想定するとして、そのコントロールを行き渡される媒体が何かといえば、繰り返しになるが、本研究では「コード」であると考える。このことにより、「価値の源泉」と紐づいた「コード」の拡散・反復・体系化が言説形成＝編成を生み出し、それがその社会の文化的特性や構成員の思考・行動様式を規定するというような連関を成り立たせるということになる。

もしある人がこのような言説形成＝編成の下で完全に「文化的ヘゲモニー」によってコントロールされている場合には、「言わされる」、あるいは、「言えない」という意識が喪失し、あたかもそれが自分の意志でそう言っているかのような錯覚に陥ることになる。このように、社会による刷り込みを積極的に受け入れ反復しようとする者たち――及び彼らの言動――を、本研究では社会を継続させる主動因とし、その社会の保守層を形成していると措定する。一方、反復をする適性を欠く者、単純な反復では収まりきらない「差異」を内包する反復者、もしくは、マイノリティまたは外部のコミュニティを反復しようとしてマジョリティの反復者との軋轢を経験する者は、社会から脱落するか、もしくは積極的に社会から離脱し、社会を改革しようとする原動力と考える。そしてこの改革者＝反抗者が新たな言説形成＝編成の起爆剤になることは、近代ヨーロッパにおいて、宗教によって築かれたコード体系が科学によって生み出されたコード体系によって主流（中心）の座を奪われる過程に見て取ることができる。また、ある社会に別の強力な「外部者」が侵入し、「主体」の位置を剥奪したとき、その「外部者＝主体者」が新たなコード体系を作り出し、それを自らのコードとするのみならず、そのコードを被支配者に押し付けてくる場合――その典型的な例は、植民地化されるということであるが――には、支配者のイデオロギーがコード形成に介入し、支配者/被支配者の関係を正当化し当然とするような言説編成が築かれていくのである。そしてこのようなコードの入れ替えが、たとえば英領インドで起こり、コードの選択権の保持者が先住民のインド人から支配者のイギリス人へと移行したのである。一方日本では、幕末から明治、太平洋戦争敗戦後の占領期の２度、体制的な「外部者＝主体者」の出現は免れたものの、日本はそれまでの言説編成を激変させるような変化を被ったのであった。

４．研究成果

（１）本研究課題以前に達成した研究成果について：研究代表者は、本研究課題に至る研究において、19 世紀における西欧の近代化言説形成の帝国主義的拡張により、その言説編成の網に取り込まれた非西欧圏がいかに変容させられていったかを中心に研究を行ってきた。その中で、多くの非西欧地域では、近代化という名の下で植民地化政策が実施され、現地語や伝統的文化を否定もしくは他者化される一方で、西欧の経済圏の枠組みに組み込まれていったのである。一方、植民地化を逃れた日本は、西欧の「模倣者」／「ハイブリッド」となり、西欧の亜流の近代化言説形成を周辺諸国へと拡張していったことを明らかにし、その研究成果を纏め、平成 25 年 3 月に著書『「反抗者」の肖像――イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成――』（溪水社：575 頁）として出版し、公表した。

（２）本研究課題の研究成果について：本研究課題の下での研究においては、当初の予定として研究期間の３年間に研究対象地に行き調査し、日本及び海外で資料を収集すること、及び最終年度に研究成果を出版・公表することを目的とした。しかしながら予期せぬコロナ禍により、研究期間前半にその時点での研究成果の公表を先に実施し、英領インドにおける植民地政策とインド表象の構築、白人優位の世界システムへの植民地地域の取り込みと植民地統治下にあるアジア地域の土着性の変容、そして、そのようなアジアの植民地化に直面した日本の近代化の促進と対抗言説の創出、さらにそのように逸早く独自の言説形成を開始した日本が太平洋戦争の敗戦を機に GHQ の占領政策によってアメリカの言説編成にいかに取り込まれていったかについて、英・米・印・日等の視点から、共時的・通時的、及び俯瞰的に行った比較研究を研究代表者と、台湾とロシア（ソ連）の研究者を含めた５名の研究協力者で纏め、『「近代」の反復と多様性――「東と西」の知の考古学的解体――』（溪水社：424 頁）という書名で令和３年６月に出版した。また、当該研究の「知の考古学」的方法論の理論的な構築については、上記の著書から理論部分

を抽出するとともに、それを簡潔にまとめて作成した論文を「『「近代化」の反復と多様性』の方法論について――「東と西」の知の考古学的解体に関する研究――」として令和 4 年 7 月に『月刊 考古学ジャーナル 7』に掲載し、公表を行った。

上記の研究成果のより具体的な内容は、以下のとおりである。

研究の対象時期に関しては、イギリスを中心とする列強諸国が非西欧地域の大部分を植民地政策の下で支配した 19 世紀から 20 世紀前半、そして、第 2 次世界大戦を経て西欧帝国主義がアメリカの「新帝国主義」に取って代わられ、その世界体制の下、次々に独立した被植民地地域が独自のナショナル・アイデンティティ形成を模索していく第 2 次世界大戦直後から現在までのポストコロニアル期を扱った。旧被植民地地域の中では、特にインド・バングラデシュ、及び、台湾のナショナル・アイデンティティ形成の試行錯誤の過程を詳しく論述した。日本については、西欧の「模倣者」／「ハイブリッド」からアメリカの「模倣者」／「ハイブリッド」――むしろアメリカ「新帝国主義」に組み込まれた優等生――として経済一辺倒の「平和日本」に変貌したが、その劇的な変容のプロセスを GHQ の占領政策を分析することで明らかにするとともに、日本人が過去の帝国主義の記憶(負債)とどのように向き合おうとしてきたのかを検証した。そして、かつて東西冷戦時代の「東」の陣営の覇者であった旧ソ連（現ロシア）のヨーロッパでもなくアジアでもないナショナル・アイデンティティについても概観した。これらの地域の戦後から現在に至る研究は、一見すると一貫性のない寄せ集めの研究群に見られるかもしれないが、しかしながら、19 世紀から 20 世紀における西欧諸国の「西」とそれ以外の地域の「東」というサイード的オリエンタリズムによって特徴づけられる「東と西」の二項対立的構造に組み込まれていたアジア世界が植民地支配から解放され、「反復」と「反動（反抗）」の対立するベクトルによる振り子運動の中で新たな近代的ナショナル・アイデンティティを模索することにより、西欧中心の「東と西」構造は解体、あるいは新たな「東と西」構造に変容しつつあることが、本研究課題で扱われたインド、バングラデシュ、台湾、及び、戦後日本と旧ソ連（現ロシア）の分析から見て取ることができる。それらの国々は、一方でインド、バングラデシュ、台湾のように自分たちの「真の」ナショナル・アイデンティティを見出す倦むことのない模索を行ってきた国々と、他方、「西」と「東」のどちらにも安住できずその都度ペルソナ（仮面）を使い分けてきた戦後日本や旧ソ連（現ロシア）に分かれるといえるだろう。このようなナショナル・アイデンティティに関する試行錯誤はこれらの国々に限らずポストコロニアル期、そして現代にいたる多くの国々が模索するところであり、したがって、現実の世界においてはさまざまな「言説形成＝編成」が不協和音を立てながら併走している。まさに 19 世紀西欧帝国主義下の「東と西」言説支配の解体／変容、あるいは、新たな「東と西」言説の再構築が進行しているのである。

以上のように研究成果を著書として公表するとともに、コロナ禍の収束後に実施したフィールドワークによって収集したデータや歴史資料を「知の考古学」的方法論を用いて分析し、考古学者が地層から過去の遺物を発掘してその時代の生活様式を復元するように、英国植民地から独立したインドとバングラデシュ、及び、満州事変から太平洋戦争終戦までの日本帝国主義時代の日本、そして、敗戦により GHQ の占領政策を経た戦後日本社会における価値観の変容や思考傾向の様態の復元を行い、その研究成果を論文、及び口頭発表により公表を行った。

（３）研究成果の研究領域における位置づけとインパクト：本研究は、文学・紀行文・雑誌記事等の英語及び日本語資料を「知の考古学」的方法という新たな言語文化的方法論により分析し、イギリスの近代化モデルと日本の近代化モデルの相違点、及びポストコロニアル状況を明らかにすることで、従来、近代化＝西洋化と考えられがちであった「近代化」概念を修正し、21 世紀に適用できる新たな「近代化」概念を構築する試みであると同時に、言語文化研究領域の研究においては、伝統的な西欧中心の研究とそれへの対抗言説としてのポストコロニアル研究（脱西欧・脱植民地主義研究）との二項対立的な様相を呈している現状であるが、本研究はそのような二項対立的な閉塞感を打ち破り、より複層的・複眼的なアプローチを提示するものである。

（４）研究成果の今後の展望：ソビエト連邦の崩壊の後、アメリカの１国支配が継続するかと思われたが、アジアの中で中国が台頭し今やアメリカと世界の覇権を競う超大国になっている。また、インドの発展も目覚ましいものがある。その意味で、もはやポストコロニアル期は終わり、ポストコロニアル後の世界になってきている。そのような世界において、これまでの「グローバリズム」という超大国アメリカを中核とする世界的な言説編成による規制の網ではない、明らかに別種の世界規模の言説形成＝編成が生まれつつある。その新たな言説形成＝編成のエージェントは金融・ファンド、あるいは、環境・生態系や人権・解放にかかわる運動といった極めて「匿名性」が強く国際的浸透性のある存在であり、IT などのテクノロジーを駆使し、われわれの思考・行動を規制する網を張り巡らそうとしているのである。しかしながら、その「価値の源泉」は、これまでのようにイギリス、アメリカ、あるいはソ連といった特定の国家に根差したものではなく、ある種の突発性や偶然性によって竜巻のように発生しては拡散を繰り返すプロセスそのものとして、従来の研究方法ではその実態を的確に把捉することが非常に困難なものである。

研究成果の今後の展望として、本研究課題のもとで構築された「知の考古学」的方法という言語文化的研究方法論は、従来の研究方法やポストコロニアル研究では捉えきらない現在進行しているこのような世界的な言語文化的様相を解明できるツールの１つになりえるものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 伊勢芳夫	４．巻 770
２．論文標題 『「近代化」の反復と多様性』の方法論についてー「東と西」の知の考古学的解体に関する研究ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊　考古学ジャーナル　７	６．最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊勢芳夫
２．発表標題 帰納的思考と演繹的思考――KiplingとDoyleの世界表象
３．学会等名 キプリング協会全国大会第23回
４．発表年 2024年

〔図書〕　計4件

１．著者名 伊勢芳夫　他５名	４．発行年 2023年
２．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	５．総ページ数 53
３．書名 言語文化共同研究プロジェクト・Cultural Formation Studies V	

１．著者名 伊勢芳夫編著　他５名	４．発行年 2021年
２．出版社 溪水社	５．総ページ数 424
３．書名 「近代化」の反復と多様性ー「東と西」の知の考古学的解体ー	

１．著者名 伊勢芳夫　他５名	４．発行年 2021年
２．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	５．総ページ数 64
３．書名 言語文化共同研究プロジェクト・Cultural Formation Studies III	

１．著者名 伊勢芳夫、他8名	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪大学大学院言語文化研究科	５．総ページ数 85
３．書名 言語文化共同研究プロジェクト・Cultural Formation Studies II	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関